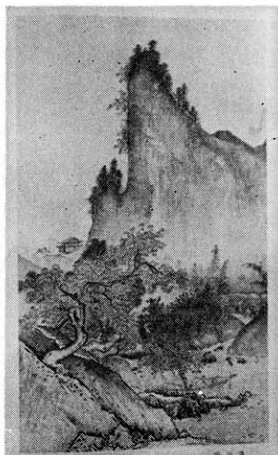


掛軸

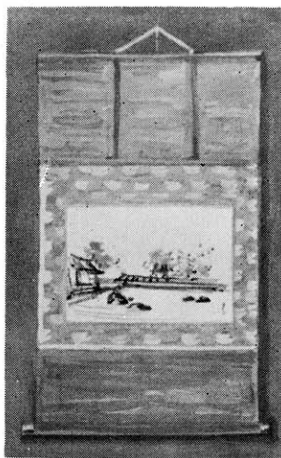
軸は現在掛軸などといつて書画類を床の壁にかけて鑑賞する形式の一つであつて、支那では桂軸といつていう。

起源は、はつきりせぬらしいが、始まりはチベットあたりのようであつて、仏画をかけて拝むために軸をつけてさげた

四季山水図
雪舟筆



掛軸



信仰の掛軸

掛軸と曼荼羅

熊野曼荼羅図



春日宮曼荼羅図



ことに始まると思われている。本来は仏教信仰に伴う荘嚴の具であつた。わが国においては蔓茶羅の礼拝に始まつたもののように蔓茶羅については神護寺の両界蔓陀羅が、わが国最古のものといわれるが熊野蔓茶羅や春日蔓茶羅（博物館蔵重要文化財）はあまりにも有名である。春日神社は約千二百年前建立され当初仏式であつたが途中から神式に變つた、本来藤原氏の氏神であつたという。

景雲元年、称徳天皇の神護、武甕槌神たけみづちの神託で常陸国鹿島からこの地に遷座、経津主神ふつれし、天兒屋根命あめのこやね、比売神の三神にも呼びかけ平城京の守護神として鎮座したことになつてゐる。

一条天皇以来皇室の崇拜も深く、後には広く一般の信仰をうるに至つたものであると云うが、蔓茶羅や仏画の掛軸に礼拝する事は直接神社に、詣でる以外に神仏に対する崇敬の心が新らしく起る信仰的立場によつたものである。後には書画に対する鑑賞的視野がひらけ遂に信仰の意味をはなれて鑑賞するようになり、鎌倉、室町時代にいたり建造物に床の間の造られるに及んで更に信仰をはなれて掛軸を室内装飾に用いるようになったものでありといわれている。

日本画沿革史に

前代に於て絵画は仏教伝布の法便として必要なると、装飾の用に供したるとより外は絵画というものなかりしに、平安朝に至りては、花鳥山水、及び風俗画等を作るに至り、茲に全く美術思想に絵画を生し、其術を施す処の区域も、前代より更に廣大となりて、縁起、草子、日記、物語等の面屏風、画卷物、絵経文の類盛んに行われ、又障子、壁等に画き、上臈の扇面、枕、経巻の表紙に経文の心ばえを画き、其他几帳、帳台、厨子棚、文房具、化粧道具、男女各種の服装、輿車、馬具の類に鳥獸草花の模様を画く等、大

いに流行したのであるが、当時未だ所謂画幅の堅物はなかりき、其之あるは近古貞和の頃、足利氏が茶場の室など作りて、装飾に用うることなせしより、たつものでふ絵は多くなりしかど、此の頃は大方横の巻物にて、たつものと云へば、神仏の像、人物画、肖像等に限りたりき。

とある。

(事物起源考)に

寢殿造、武家造、書院造はわが国住宅の三大様式とされているが、頼朝は、清盛とはちがつて東国の片田舎たる鎌倉に幕府を開き、ここを一大都市として発展して以来その邸宅建築としては、事実上寢殿造りにあきたらず、かれ等の要求を満足せしめるよう、或る程度の訂正を加えたものがこの武家造りで、これがいよいよに成熟し、書院造りとしての一つの様式に定型化されたものと云うべきである。

とある。

(掛物古語拾遺) 貞丈雜記には

座敷の上座に床と云物を作る事上古になきものなり、鎌倉の頃以来の事か、尊氏公夢窓国師に物語ありしより將軍家代々禅家の国師を師として御更衣ありしなり(更衣とは弟子になりて僧衣を受けて着する也)然る間禅法世にはやり出家の風俗武家に移る事多し、床も仏家にての仏壇なり、本尊を置く所也、床に床絵を掛け三貝足をかざる事など皆出家の風なり、書院と云も仏書を講ずる所なり。

とあつて後の掛軸も床の間も始めは寺院にならつて作られたものであろう事を知る事が出来る。

書院が僧家のみに限るものでない事は、宋の時代、応天府の民曹誠が、部屋をひろげ万巻の書を集め学者講習

の場とし、これを書院とよんだというが、わが国では、昔学問といえば僧家のみ伝わつたので、書院もおのずと初めは僧家にかぎられていたのであるが武士が学問、芸術の世界にも進出するようになってから武家に移つたものであるという。

床の起源と思われるのは書院造りの上段の間が極度に縮少して上段の間（即ち床）と板との区別がなくなつたためであらうか。床はこういう起源をもつ為めその奥行は浅くせいぜい二尺どまりであつたのが、のちにたみを基準とする寸法のため半間の床が一般化してきたといわれている。

これらは時代の推移と共に日常生活に適應するものとして考へられたので、往古は家の内、皆土間に立居したので、この古の土間の遺風が残つて、床の間という処を傍に設け、主君は此の床に座わり、従者は土間にすわのために、敷物を用い、座敷と呼んだ。これが今日でも、家の内に座敷の名がある所以であり屋内全部を畳敷にしたのは応仁の乱以後といわれる。其後、床には主君に替えて掛物とするようになったので、帰依する仏画、尊敬する肖像画を飾るところとなつた。

始めは掛軸も、画は仏画、書は仏書が殆んどであつたものが、後には肖像画やその他の書画もあらわれ、一般民間の住居にも床の間を真似て設ける様になつたのが室町時代頃からであるといわれる。肖像画の発展したのは、わが国では、人間性を強く求めだした鎌倉期からの事といわれる。栄耀栄華をわがものとして奢つた藤原と平家を倒して立上つた東国武士は力による現実の把握を目標に、以前の夢幻的で他力に頼るより、実質的に自己の力を頼る豪健な精神で現実感をとらえ、人間性を強く求め、人間が深く観察され、追求されるようになった。この影響で、絵画の面でも個性的表現にまで及んだ。肖像画にも強い影響を及ぼし、写される人の容貌は無論

のこと内面的な性格描写にまで徹底したのが特色といわれている。

像主となつた人物は歴史的に有名な人は勿論、天皇公卿、僧侶、歌人、学者から、のちには婦人もかかれるようになつた。

肖像画を似せ絵と呼び藤原隆信、藤原信美等は似せ絵の名手として鎌倉期の代表作家であるといわれている。日本画は仏教伝来とともに現はれた日本独特の画風で一番古いのは奈良朝時代に起つた春日流であるといわれ藤原鎌倉時代には巨勢金岡が仏画を創始し、この時代の絵巻物は藤原基光を祖とする土佐流が多くつくつた。

また足利氏は尊氏以来臨済宗に帰依し、尊氏は天竜寺をつくり、義満も相国寺をつくつたが義満は京都と鎌倉の五大寺を中国風に（五山）と指定して保護した。五山の禅僧は政治、外交の顧問となり中国を往復して、中国から朱子学を学び、さかんに漢詩、漢文をつくつた。これらを五山文学といわれるが五山の僧侶のあるものは中国から水墨画の技法を学び、寺の裝飾としてこれをもちいた。それを中国の模倣から独創の偉大な美術に發展させたのが雪舟である。この頃雪舟、雪村、土佐光信など有名な画家が現出するとともに茶道の流行もあり、益々掛軸の風習が普及された。（表具）の名称を用いたのは天正（約三百八十年前、信長、秀吉の時代）頃からと伝えられており江戸時代には更に多くの画家、俳人等が輩出されるに及んで益々表具師の数も増し、したがつて刷毛の需要も多くなつたものであらう